



ジャン・シベリウス (1865~1957)

シベリウス 生誕150周年 なぜ日本で人気があるのか

吉松 隆

現代音楽への 移行期

シベリウスが活躍していた時代は、ロマン派が終焉を迎え、近代現代の新しい音楽に移行してゆく狭間の20世紀初頭。一方に落日を迎えつつある巨大で華美な後期ロマン派サウンド(ポスト・ワーグナー世代のR.シュトラウスやマーラーなど)があり、もう一方で新しい時代の息吹を感じさせる先鋭的な現代音楽の響き(ドビュッシーやストラヴィンスキー、そしてシェーンベルクなど)が生まれつつあった、そんな時代だ。

北欧フィンランド出身のシベリウスは、そんな20世紀が始まる前夜、〈フィンランディア〉や交響曲第2番のよ

うな民族主義的存在感を放射する名作で音楽界に第一歩を踏み、人気作曲家の高みに躍り出た。ただし、ブラームスやブルックナー系のオーケストラの響きをベースに、故国フィンランドの素朴かつ繊細なテイストを組み込み、やがてドビュッシー的な(そして微かにモダニスト的な)響きを織り込み始めた彼の音楽は、現代音楽の時代になりつつあった中央楽壇からは(プッチーニやラフマニノフなどと並んで)徐々に過去の作曲家扱いされるようになっていたことは否めない。

しかし、イギリスとアメリカの聴衆は、そんなシベリウスの音楽をこよなく愛した。その理由は色々あるが、(過度に斬新で先鋭的なモノは好まない温厚なタイプの)同時代の作曲家や指揮

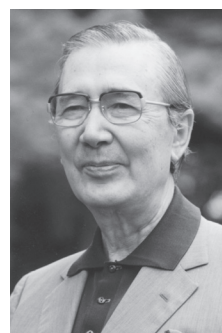
者に強力な支持者がいて、熱心にその音楽を紹介し(交響曲第3番はそんなイギリスの作曲家の一人、グランヴィル・パントックに献呈されている)、それが一般の聴衆の熱い支持を受けたことが大きいように思われる。

紹介者たち

日本人のシベリウス好きが始まるのはそれよりは少し遅く、シベリウスの没後(1957年)のことになるが、強力な紹介者の存在では負けていない。

その筆頭は、何と言っても指揮者の渡邊暁雄(1919~90)だ。日本人牧師の父とフィンランド人の声楽家の母の間に生まれた氏は、戦後、指揮者として活動を開始。1956年に日本フィルハーモニー交響楽団の初代常任指揮者に就任し、日本のクラシック音楽の礎を築くと共に、1961年には世界初となるシベリウス交響曲全集を録音

(発売は翌1962年)。イギリスのバルビローリやビーチャムなどと並ぶ、世界的なシベリウス指揮者として歴史に名を刻んでいる。



渡邊暁雄(提供:日本フィルハーモニー交響楽団)

そして、もう一人は、ピアニストの館野泉(1936~)だ。慶應義塾高校(実は私と同じで、先輩後輩の仲である)から東京芸術大学の



館野泉 ©武藤章

ピアノ科に進み、卒業した後、渡欧先にフィンランドを選択。「北欧のピアニスト」として名を馳せつつ、1970年代になるとシベリウスのピアノ曲や歌曲のアルバムを発表し始める。当時はオーケストラ作品以外のシベリウスの音楽はほとんど知られておらず、特にピアノ曲などは本国フィンランドでも「(コンサートでプロが演奏するレベルではない)私的な作品」扱い。氏によって初めて紹介された作品や、発掘された作品も多く、シベリウスの音楽に関しては世界的な第一人者である。

また、1967年(シベリウスの没後10年)には、早くも作曲家の菅野浩和(1923~2011)が『シベリウス——生涯と作品』(音楽之友社)を書き下ろす。第4番を「無駄な音符がひとつもない」「ベートーヴェン以降最高の交響曲」などと(いくぶん大げさながら)高評価した評論家セル・ 그레이の言などを紹介し、後期の作品の理解への道筋を刻んだ名著である。

そういった先輩たちに続いて、かく言う私も作曲家デビュー当初からシベリウスを「魂の師匠」と公言し、音楽誌や新聞あるいはラジオなど機会があるたびにその音楽の紹介に努めたので、指揮者・演奏家・作曲家の強力なタッグによる紹介普及体制が、実を結んだと言っていいかも知れない。

風土と自然観

私がシベリウスの音楽と出会ったのは1968年頃。当時、カラヤンが後期の交響曲（第4番～第7番）を新譜で次々に発表していて、その中の特に第6番と交響詩〈タピオラ〉に衝撃を受けたのが始まりだ。

ベートーヴェンを筆頭にしたクラシック「芸術」音楽の洗礼はその前年に受け、音楽を生涯の仕事に選択してしまったほどだが、「20世紀の日本に生まれた自分」という視点から見ると、平安時代から江戸時代まで別の音楽史を歩んできた私たちにとって、彼らの音楽は「ルーツが違う」ことは否めない。普遍的な魂のレベルでは理解できても、皮膚感のレベルで「違和感」があったのだ。

しかし、シベリウスの後期の作品群は、文字通り「琴線に触れた」。西洋文化への畏怖感と距離感、ロマン派や

モダニズムへの^{どうけい}憧憬、魔法やサウンドのセンス、音楽の奥に潜む物語の醸し出す自然観、そして楽曲の持つ温厚な叙情性と謙虚さ。それは、頬を伝わる涙で瞬時にして分かった。その時から、シベリウスは私の「魂の師匠」となった。

あるいは、ヨーロッパから遠く離れた極東の島国である日本と、シベリウスの祖国である北欧フィンランドが、西洋文化との距離やキリスト教に縛られない自然観および風土という点で似ているということもあるのかも知れない。実際、私が最初に第6番を聴いたとき真っ先に思い浮かべたのは宮澤賢治の『銀河鉄道の夜』だったし、シベリウスが創作の背景としているフィンランドの民族叙事詩「カレワラ」は日本の神話の世界とどこか似ている。クレルヴォやレミンカイネンの物語は、^{すさのおのみこと おおくにぬしのみこと}素戔鳴尊や大国主命を思わせるし、大気の子女や森の精が浮遊する自然観はアイヌの「ユーカラ」に登場するカムイたちを思い起こさせる。

同世代の文豪たち

ちなみに、1865年（慶応元年）生まれのシベリウスは、日本が近代国家の仲間入りをすべく西欧の文化を吸収し始めた最初の留学組と同世代でもあ

る。なにしろ、シベリウスがヘルシンキの音楽院を卒業した後ベルリンに留学した1889年というのは、森鷗外が帝大を卒業してベルリン留学したのとほぼ入れ替わりの時期（1884年渡欧、1888年帰国）。世代的にも、ロンドン留学（1900～01）した夏目漱石など我が国の明治の文豪たちと同じ世代（鷗外：1862年生まれ、漱石、幸田露伴、正岡子規：1867年生まれなど）である。

余談ながら、私の曾祖父である吉松^{こまぞう}駒造は、シベリウスと全く同じ時期（1889～91）に医学留学でドイツに行っており、滝廉太郎や山田耕筰などの音楽留学組はそれより少し遅い（廉太郎1901年、耕筰1910年）。歴史に「もしも」を持ち込むのは無粋だが、もし鷗外世代の留学組が日本に戻り、日本神話を題材に作曲を始めたなら……あるいは、宮澤賢治のような才能が童話の代わりに交響曲を書いていたなら……まさにシベリウスのような音楽が、あの



筆者の曾祖父吉松駒造（1858～1923）シベリウスと同時期にドイツへ留学していた

時代の我が国に生まれていった可能性もあったことになる。そのあたりの距離感も、日本人がシベリウスの音楽に親近感

を覚える要因だろうか。

沈黙のむこうに

最近、シベリウス生誕150周年記念のFM番組で、館野泉さんとシベリウスの音楽を（初期・中期・後期と）3日にわたり聴き通す機会があった。初期の熱き〈フィンランディア〉や交響曲第2番から、中期のヴァイオリン協奏曲、そして渋く暗い（沈黙の「間」を感じさせる）第4番を経由して晩年の第6番・第7番に至り、最後の作品〈タピオラ〉の終わりの音がすうっと消えて行った時、二人して「ほお〜ッ」と溜息のような深い吐息を漏らすことになった。

その感慨を説明するのは難しいが、東洋と西洋の狭間に横たわる広大な森の奥の……どこにも知れぬ未知の宇宙。そこに足を踏み入れた不思議な響き。そして、音楽のその先にある深い深い「沈黙」。これはもはや「西洋の音楽」などではない。まるで禅寺で「無」に触れたような境地に一瞬引き込む彼岸の音楽……と言ったら大げさに過ぎるだろうか。

シベリウスの音楽は、まだ知られざるさらなる「奥」の宇宙を旅する者を待っているのかも知れない。

（よしまつ たかし・作曲家）

◎ファゴット奏者

岩佐雅美

Masami Iwasa

気持ちよく歌えるよう
私、支えます

《今年はシベリウスの生誕150周年。
読売日本交響楽団はヴァンスカの指揮
でシベリウスの名曲を披露します。フ
ァゴットも活躍しますね》

たとえば、シベリウスの交響曲第2
番第2楽章の冒頭。ティンパニに続く
コントラバスとチェロによるピッツ
ィカートが始まりますが、それをバック
にファゴットの憂いに満ちたきれいな
ユニゾン（同一旋律を複数で演奏）
があります。ちょっとでも音程やタイ
ミングがずれるとすぐわかってしま
う。とても神経を使うんですよ。

シベリウスのヴァイオリン協奏曲で
は、第2楽章にソロのヴァイオリンを
セカンドファゴットとホルンが支える
ところがあります。ヴァイオリンがこ
ちらを気にせず、気持ちよく、自由に
弾けるようサポートします。

シベリウスはベートーヴェンやショ
スタコーヴィチと同様に、ファゴット
が好きだったのではないのでしょうか。
演奏していて思うのですが、シベリウ

スはファゴットの低音をとっても魅力的
に使ってくれているような気がするん
です。逆にファゴットがあまり好きで
はないと思うのは、ブルックナーか
な。ある指揮者が「ファゴット吹きで
ブルックナーが好きという人がいたら
尊敬する」と言っていました。それ
ほどファゴットは音が少ないです。

《ファゴットの2番奏者って地味だ
けど欠かせない存在だと言われます。
それはなぜでしょう》

2番吹きに求められるのは、広い視
野でしょうか。フルートやオーボエな
ど高い音域の楽器を担当する人や、首
席ファゴットの人が吹きやすいように
音程、音色を合わせなければなりませ
ん。そして、木管全体も支えます。チ
ェロやコントラバスとのバランスにも
気を配りつつ、ホルンほか金管のこ
とも考える必要があります。まさに縁の
下の力持ちです。逆に私が目立つよう
ではダメなんですね。

《岩佐さんがファゴットに出会ったき
っかけは？ どんなところに惹かれた
のでしょうか》

小学校ではフルートでした。中学校
の吹奏楽部でも吹きたかったのです
が、フルートは人気があり、余ってい
たファゴットに回されたのが最初のき



っかけです。その時はファゴットって
どんな楽器？って感じでした（笑）。
帰宅して、たまたまかけたCDがチャ
イコフスキーの交響曲第6番〈悲愴〉
で、スピーカーに耳をつけながら、あ
あこの音か、温かくて深みのある、こ
んないい音を出せるようになりたい、
と思ったんです。先生が音大でオーボ
エを学んだ方だったということもあっ
て、熱心に教えて頂きました。

《東京芸大の附属高校から芸大に進学
し、プロの道を選んだのですね》

小さいころからピアノをやってい
て、ピアノの先生になりたいという夢
を持っていたのですが、ファゴットに

出会ってしまってピアノと同じく
らい、いやそれ以上に好きになっ
てしまった。出来ればどちらもや
めたくない。ファゴットを専攻す
ればピアノは副科で続けられるな
あと。そんなことでファゴット吹
きへの道を歩み始めてしまったの
です。ファゴットの曲としては、
モーツァルトのファゴット協奏曲
が有名ですが、サン＝サーンスの
ファゴット・ソナタをはじめ、ソ
ロにも室内楽にもたくさん素敵な
曲があります。12月3日に、読響
の仲間たちとプーランクの室内楽
曲を東京・ムジカーザで演奏しま
す。どの曲もとてもいい曲なの
で、ぜひ演奏会に足を運んで頂
き、聴いてほしいです！

《読響には2005年5月に入団、ち
ょうど10年が過ぎました》

首席の吉田将さん、井上俊次さんら
偉大な先輩方に教わりながらの、あ
という間の10年間でした。ただ、木
管では私より年齢が若いのはクラリ
ネットの金子平さんだけなので、相変わ
らず自分はまだまだ若手だと思ってい
ます。読響でたくさんの曲を演奏し、
レパートリーは広がりましたが、演奏
していない曲は数多くあります。これ
からもどんどん挑戦していきたいし、
ファゴットの音色の面白さ、奥深さを
客席にお伝えできればと思います。

ドイツで活躍する名匠・上岡が振るベートーヴェン〈第九〉

12/18(金) 19:30 〈第九〉特別演奏会
サントリーホール ※19:00からプレ・コンサート

12/19(土) 14:00 第182回 東京芸術劇場マチンキーズ
東京芸術劇場コンサートホール **完売**

12/20(日) 14:00 第84回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール **完売**

12/22(火) 19:00 第587回 サントリーホール名曲シリーズ
サントリーホール

12/24(木) 19:00 第5回 東京オペラシティ名曲シリーズ
東京オペラシティ コンサートホール

12/25(金) 19:00 第20回 読響メトロポリタン・シリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

12/26(土) 17:00 第13回 大阪定期演奏会
ザ・シンフォニーホール(大阪)

ベートーヴェン：交響曲 第9番〈合唱付き〉

指揮：上岡敏之

ソプラノ：イリーデ・マルティネス

メゾ・ソプラノ：清水華澄

テノール：吉田浩之

バリトン：オラファ・シグルザルソン

合唱：新国立劇場合唱団

合唱指揮：三澤洋史



上岡敏之



イリーデ・マルティネス



清水華澄



吉田浩之



オラファ・シグルザルソン

12月〈第九〉公演の聴きどころ

年末恒例のベートーヴェン〈第九〉公演を、12月18日から26日まで開催する。今年の指揮台に登場するのは、カリスマ性あふれる音楽作りで人気の上岡敏之。

ドイツのヴッパータール市立歌劇場の音楽総監督を務める上岡は、これまでにバンベルク響やバイエルン放送響、シュトゥットガルト放送響とも共演するなど、オペラ、コンサート両面で目覚ましい活躍を見せてきた。“劇場叩き上げ”の指揮者として本場ドイツで経験を積んだ名匠が、その手腕を十分にふるい、独自の解釈でベートーヴェンの神髄に迫る。これまで読響と数多くの名演を築き上げてきた上岡のタクトから、どのような熱いドラマが生まれるのか、期待したい。

声楽陣には世界で活躍する実力派を揃えた。ソプラノは、華麗な歌声で魅了する歌姫イリーデ・マルティネス。ウィーン国立歌劇場の専属歌手を務め、ミラノ・スカラ座、パリ・オペラ座、ザルツブルク音楽祭などでも絶賛を浴びている。メゾ・ソプラノは、近年目覚ましい躍進をみせる清水華澄。清水は昨年6月のヴェルディ〈レクイエム〉で読響と共演した。〈第九〉でもその確かな歌唱力を聴かせてくれるだろう。テノールは、瑞々しく伸びやかな美声と豊かな表現力を誇る吉田浩之。新国立劇場、日生劇場などで多くのオペラに出演するほか、コンサートでも幅広いレパートリーを誇っている。バリトンは、ドイツを拠点に活躍する実力派オラファ・シグルザルソン。上岡も関わったザールブリュッケン歌劇場の専属歌手を務める傍ら、ボン歌劇場、バーゼル歌劇場などにも客演し、高い評価を得ている。合唱には日本が誇るプロ団体の新国立劇場合唱団を迎える。

最終楽章で高らかに響く“歓喜の歌”は、年の瀬の日本を彩る風物詩としても親しまれている。その至高のハーモニーを、心ゆくまでご堪能いただきたい。(文責：事務局)

こんなに便利！ 読響チケットWEB

読響チケットWEBは、インターネットから読響のチケットをお求めいただける専用ウェブサイトです。24時間いつでもお申し込みができ、ご自身でお好みの座席をお選びいただけます。

以下のURLもしくは公式ウェブサイトのトップページ【読響チケットWEB】のボタンから、ぜひご利用ください。

読響チケットWEB <http://yomikyo.pia.jp/>

※初回お申し込み時は利用登録(無料)が必要です。

読響チケットWEB

検索

名匠ボーダーの〈新世界〉で、新年が華やかに幕開け!

1/7 (木) 19:00 第588回 サントリーホール名曲シリーズ
サントリーホール

1/9 (土) 14:00 第183回 東京芸術劇場マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ワーグナー：楽劇〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉
第1幕への前奏曲

ヒナステラ：ハープ協奏曲

ドヴォルザーク：交響曲 第9番〈新世界から〉

指揮：ミハエル・ボーダー

ハープ：グザヴィエ・ドゥ・メストレ



ミハエル・ボーダー



グザヴィエ・ドゥ・メストレ

オペラを得意とする名匠が振る後期ロマン派の傑作〈人魚姫〉

1/14 (木) 19:00 第554回 定期演奏会
サントリーホール

R. シュトラウス：交響詩〈ドン・ファン〉

リスト：ピアノ協奏曲 第2番

ツェムリンスキー：交響詩〈人魚姫〉

指揮：ミハエル・ボーダー

ピアノ：フランチェスコ・ピエモンテージ



ミハエル・ボーダー



フランチェスコ・
ピエモンテージ

92歳を迎えた巨匠による特別演奏会《究極のブルックナー》

1/21 (木) 19:00 特別演奏会《究極のブルックナー》
東京芸術劇場コンサートホール

1/23 (土) 14:00 特別演奏会《究極のブルックナー》
東京オペラシティ コンサートホール **完売**

ブルックナー：交響曲 第8番

指揮：スタニスラフ・スコロヴァチェフスキ



スタニスラフ・
スコロヴァチェフスキ

日本屈指の実力派・小山実稚恵らの究極のアンサンブル

1/27 (水) 19:30 第9回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※19:00から解説 **完売**

シューベルト：ピアノ五重奏曲〈ます〉ほか

ピアノ：小山実稚恵 ヴァイオリン：小森谷巧、長原幸太

ヴィオラ：鈴木康浩 チェロ：毛利伯郎 コントラバス：石川 滋



小山実稚恵

首席客演指揮者・下野竜也が名曲〈悲愴〉で渾身のタクト!

1/29 (金) 20:00 第12回 読響カレッジ
文京シビックホール ※19:30から解説

チャイコフスキー：交響曲 第6番〈悲愴〉

指揮：下野竜也

ナビゲーター：中井美穂



下野竜也

常任指揮者カンブルランと辻井伸行が“夢の競演”

2/4 (木) 19:00 第589回 サントリーホール名曲シリーズ
サントリーホール **完売**

2/5 (金) 19:00 第21回 読響メトロポリタン・シリーズ
東京芸術劇場コンサートホール **完売**

2/6 (土) 14:00 第85回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール **完売**

デュティユー：音色、空間、運動

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第1番

ベートーヴェン：交響曲 第6番〈田園〉

指揮：シルヴァン・カンブルラン

ピアノ：辻井伸行



シルヴァン・
カンブルラン



辻井 伸行

色彩の魔術師カンブルランが描く二つの《夜の音楽》

2/12 (金) 19:00 第555回 定期演奏会
サントリーホール

2/14 (日) 14:00 第184回東京芸術劇場マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

モーツァルト：アイネ・クライネ・ナハトムジーク

マーラー：交響曲 第7番〈夜の歌〉

指揮：シルヴァン・カンブルラン



シルヴァン・
カンブルラン

お申し込み・
お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390

(10:00~18:00/年中無休)

ホームページアドレス <http://yomikyo.or.jp/>

NISSAY OPERA 2015 〈ドン・ジョヴァンニ〉

■ 11/14 (土) 14:00、11/15 (日) 14:00 日生劇場

指揮：広上淳一 演出：菅尾友

出演：加未徹、斉木健詞、中江早希、金山京介、林美智子 ほか (14日)

池内響、峰茂樹、宮澤尚子、望月哲也、柳原由香 ほか (15日)

合唱：C. ヴィレッジシンガーズ

モーツァルト／歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉(全2幕／原語上演・日本語字幕付)

[料金] S ¥9,000 A ¥7,000 B ¥5,000 学生 ¥3,000

[お問い合わせ] 日生劇場 03-3503-3111

久石譲 第九スペシャル2015

■ 12/11 (金) 19:00 東京芸術劇場コンサートホール

12/12 (土) 15:00 ハーモニーホール座間(神奈川)

指揮：久石譲 ソプラノ：林正子 メゾ・ソプラノ：谷口睦美

テノール：村上敏明 バリトン：堀内康雄 合唱：栗友会合唱団

久石譲／新 Orbis ～混声合唱、オルガンとオーケストラのための～
ベートーヴェン／交響曲第9番〈合唱付き〉

[料金] S ¥9,200 A ¥8,200

[お問い合わせ] 東京公演：第一通信社 03-3237-4127

神奈川公演：ハーモニーホール座間 046-255-1100

ニューイヤー・スペシャル・コンサート 小林研一郎&読売日本交響楽団

■ 1/17 (日) 14:00 なかのZERO 大ホール

指揮：小林研一郎 ヴァイオリン：藤原浜雄 ヴィオラ：田原綾子

モーツァルト／歌劇〈フィガロの結婚〉序曲、ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲
ベートーヴェン／交響曲第3番〈英雄〉

[料金] SS ¥4,300 S ¥3,800 A ¥3,300

[お問い合わせ] なかのZERO チケットセンター 03-3382-9990

オービック・スペシャル・コンサート2016

読売日本交響楽団 名曲シリーズ福岡公演

■ 1/25 (月) 19:00 福岡シンフォニーホール

指揮：小林研一郎 ヴァイオリン：木嶋真優

モーツァルト／歌劇〈フィガロの結婚〉序曲、ブルッフ／ヴァイオリン協奏曲第1番
ベートーヴェン／交響曲第3番〈英雄〉

[料金] S ¥6,100 A ¥5,100 B ¥4,100 C ¥3,000

[お問い合わせ] 読響チケットセンター 0570-00-4390

ヨランダオフィス・チケットセンター 0570-033-337

中央公論

12月号

2015 DECEMBER

●定価 930円(税込)
11月10日発売

好評連載

- 宮城谷昌光 「呉漢」
- 山内昌之×佐藤優
——ラディカル・ポリティクス
- 長田暁二——唄う戦後70年史
- 小池昌代×山口文恵
——ふたりで本あわせ
- 小谷野敦——映画音痴の玉手箱
- 宇野常寛
——テレビドラマが時代を映す
- 結城豊弘——この役者ええやん!
- 宇野重規／吉崎達彦／酒井順子
時評2015

特集

「疑似科学」と科学のあいだ

「疑似科学」が人々を惹きつける理由 竹内薫／武田徹／
中谷内一也／石川幹人／左巻健男／川端裕人／松永和紀
●映画『FOUJITA』と藤田嗣治の時代 オダギリジョー×小栗康平
●安保国会と官邸前デモは何を示したか 小熊英二×宇野重規
●大村智さんノーベル賞受賞の秘密 馬場錬成

特集

アメリカの鬱屈

トランプ旋風、ヒラリー苦戦……混迷する大統領選挙
●オバマの次をめぐる大衆の熱狂
●阿川尚之×猪木武徳×久保文明
●「反知性主義」の危うい未来 森本あんり×中山俊宏
●米大統領選 乱立候補者徹底解剖ファイル

♪抽選で読響コンサートチケットなどが当たる!♪

定期購読キャンペーン実施中!

詳しくは当社販売部または中央公論ホームページまで。

TEL: 03-5299-1760 (平日9:45~17:30) <http://www.chuokoron.jp/>

◆お求めはお近くの書店、または一部のネット書店で。◆掲載内容は変更になる可能性があります。

2016年度(2016-17シーズン)のプログラムは注目の指揮者陣、豪華なソリストなど、例年に増して充実した内容です。まず《定期演奏会》と、新設する《土曜マチネーシリーズ》《日曜マチネーシリーズ》の聴きどころをご紹介します。

定期演奏会

レギュラー指揮者陣



シルヴァン・カンブルラン ©読響

常任指揮者シルヴァン・カンブルランは任期3期目(1期3年)に入り、2010年4月の就任以来、7年目のシーズンを迎えます。《定期》では6、10月、17年1月に登場。継続的に取り組むブルックナーなどに加え、絶大な強みを発揮する現代音楽も披露します。

2016年はフランスの著名な現代作曲家、アンリ・デュティユー(1916～2013)の生誕100周年。6月にフランス系屈指のチェロの名手、ジャン＝ギアン・ケラスとチェロ協奏曲《遙かなる遠い世界》を、10月には二重構造の演奏編成が面白い交響曲第2番《ル・ドゥーブル》を取り上げます。エスプリきらめく精妙な解釈にご期待を。

そして2017年は20世紀フランスを代表する作曲家のひとり、オリヴィエ・メシアン(1908～92)の没後25周

年です。本人と深い親交があったカンブルランは現代屈指のメシアン演奏の権威。節目にふさわしい企画を展開します。まず17年1月は巨大な管弦楽が壮麗な音世界を築き上げる最晩年の大作《彼方の閃光》に挑みます。

首席客演指揮者の下野竜也は4月に、20世紀イギリスの作曲家ジェラルド・フィンジの声乐作品《靈魂不滅の啓示》を振り、この清澄な秘曲に光を当てます。

名誉指揮者のゲンナジー・ロジェストヴェンスキーは9月に久々に来日し、オール・ショスタコーヴィチ・プロ(交響曲第10番など)で名人芸を堪能させてくれます。

特別客演指揮者の小林研一郎は、ブラームスの交響曲第4番などを重厚に仕上げます(11月)。



下野竜也 ©読響



ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー ©Hikaru



小林研一郎 ©読響

ゲスト指揮者



コルネリウス・マイスター ©読響

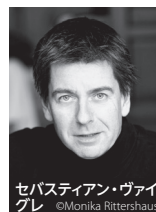
鮮烈な読響デビューを2014年秋に飾ったドイツ期待の新鋭、コルネリウス・マイスターは7月、マーラーの交響曲第6番《悲劇的》などで手腕を発揮します。

若手実力派がもう2人、初登場します。



キリル・カラビッツ ©Sasha Gusov

ウクライナ出身のキリル・カラビッツは、英国のボーンマス響首席指揮者として頭角を現している有望株。CDのプロコフィエフ交響曲シリーズが大評判で、読響とは傑作の第5番を聴かせます(5月)。



セバスティアン・ヴァイグレ ©Monika Rittershaus

ドイツのセバスティアン・ヴァイグレはフランクフルト歌劇場の音楽総監督を務めるなど、ドイツ本流の正統派です。8月に《定期》では得意のリヒャルト・シュトラウス・プロ(《家庭交響曲》など)を指揮します。

ソリスト

ヴァイオリンの五嶋みどりが読響と



五嶋みど里 ©T. Sanders

12年ぶりに共演し、コルンゴルトと、ドイツの現代作曲家ヨハネス・マリア・シュタウトのヴァイオリン協奏

曲を弾きます(10月)。後者は日本初演。円熟をみせるMidoriと、カンブルランの火花散る競演は必聴です。

12月に来るピアノの鬼才、イーヴォ・ポゴレリッチも注目です。単独でのリサイタルはともかく、日本で協奏曲を聴けるチャンスは稀有。今回はラフマニノフの人気作、ピアノ協奏曲第2番を名匠オレグ・カエターニの指揮で演奏します。

「ウィーン三羽鳥」に数えられ、本場の伝統を受け継ぐベテラン・ピアニスト、イェルク・デームスも、日本では珍しく協奏曲を披露。ベートーヴェンの第3番で滋味あふれるソロを、小林研一郎の棒で奏でます。5月にカラビッツと共演するベルリン・フィルの首席フルート奏者、エマニュエル・バユも聴き逃せない名手です。

カンブルランと6月にデュティユーのチェロ協奏曲を弾くケラスは、現代ものに定評があります。



イーヴォ・ポゴレリッチ ©Alfonso-Batalla



オレグ・カエターニ



イェルク・デームス ©H.Koyotane



エマニュエル・バユ ©Josef Fischhaber licensed to EMI Classics



ジャン＝ギアン・ケラス

土曜マチネーシリーズ／日曜マチネーシリーズ

交通の要所、池袋駅前という至便な立地条件をもつ東京芸術劇場。週末に開く《マチネーシリーズ》は年々、人気が高まっています。このため2016年度からは、同じ週末の土曜日と日曜日の午後に同一プログラムを演奏する形へ、《マチネーシリーズ》を拡充します。その初年度にふさわしい、豪華なプログラミングをご用意しました。

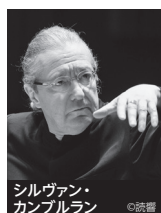
指揮者

新シーズン開幕の4月を飾るのは、ヨーロッパでの活躍が目覚ましい気鋭、**山田和樹**。得意のラテン系作品から、蒸気機関車の動きを活写したオネゲル〈パシフィック231〉で発進し、チャイコフスキー〈悲愴〉を後半に据えます。



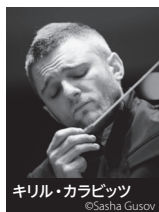
山田和樹 ©読響

常任指揮者の**カンブルラン**は6、10月、17年2月の3回登場します。いずれも協奏曲とメインの大作を周到に組み合わせた構成。6月のベートーヴェン〈皇帝〉とストラヴィンスキー〈火の鳥〉、10月のラモーン→モーツァルト（ピアノ協奏曲第15番）→シューベルト〈ザ・グレイト〉と進む古典派が軸のプロ、2月のオール・チャイコフスキーと、多彩な切り口でクラシック音楽の面白さ、奥深さを満喫させます。《定期演奏会》にも出演する期待の



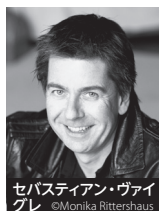
シルヴァン・カンブルラン ©読響

若手2人は、より親しみやすい曲目でその実力をアピールします。ウクライナ出身の**キリル・カラビッツ**が5月に力を入れて取り上げるのは、CDでも評判のプロコフィエフからバレエ音楽〈ロミオとジュリエット〉抜粋。



キリル・カラビッツ ©Sasha Gusov

ドイツの本格派、**セバスティアン・ヴァイグレ**は8月に、ブラームスの交響曲第1番を中心としたドイツ・オーストリア物で勝負を掛けます。



セバスティアン・ヴァイグレ ©Monika Rittershaus

ソリスト

世界的な名手から伸び盛りの新鋭まで、幅広いソリストを起用するのも、このシリーズの魅力です。

海外の奏者で最も注目を浴びそうなのは、ヴァイオリンの**ヴィクトリア・ムローヴァ**。ロシア出身の技巧派として名を馳せ、近年はバロック音楽な



ヴィクトリア・ムローヴァ ©Henry Fair

どへ芸域を広げています。5月に読響と弾くシベリウスのヴァイオリン協奏曲でも、深みを増した境地が聴けるでしょう。



三浦文彰 ©Yuji Hori

ヴァイオリンでは日本の新鋭、**三浦文彰**が17年3月にフィリップ・グラスのヴァイオリン協奏曲第1番に初挑戦するのも、大きな話題です。

ピアノも多士済々。幕開けの4月には**小山実稚恵**がグリーグの協奏曲を、**山田和樹**の指揮で聴かせます。



小山実稚恵 ©Kazuo Matsuura

ことし16歳というヤング・スター、**牛田智大**は7月にショパンのピアノ協奏曲第2番で、初々しい感性を発露させるでしょう。



牛田智大 ©Kunio Onishi

ドイツの鬼才、**マルティン・シュタットフェルト**がカンブルランの指揮で10月に弾くモーツァルトの佳品、ピアノ協奏曲第15番は、鋭い解釈で聴衆を引き付けます。



マルティン・シュタットフェルト ©Adrian Schmidt

管楽器ではウィーン・フィルの若き首席クラリネット奏者、**ダニエル・オッテンザマー**



ダニエル・オッテンザマー ©Julia Stix

が8月、モーツァルトのクラリネット協奏曲に登場し、艶やかな美音で魅了します。

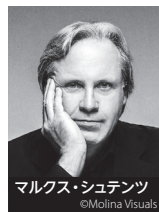
トピックス

久しぶりに来演するロシアの巨匠で名誉指揮者の**ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー**が、このシリーズのために用意するのが、チャイコフスキーのバレエ音楽〈白鳥の湖〉〈眠りの森の美女〉〈くるみ割り人形〉からの抜粋（9月）。名門ボリショイ劇場で長年腕を振るっただけに、これら「三大バレエ」は得意中の得意。各場面をほうふつとさせる表情付けや、切れ味良いリズム処理が冴えることでしょう。



ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー ©Hikaru

年末恒例のベートーヴェン交響曲第9番〈合唱付き〉を振るのは、ドイツ生まれの逸材で着々とキャリアを重ねる**マルクス・シュテンツ**。欧州各地のオーケストラや歌劇場で豊富な経験を持つゆえ、声楽の扱いにも秀でています。古楽器奏法など最新の潮流を採り入れて、おなじみの〈第九〉を鮮やかに料理します。ソプラノの**アガ・ミコライ**ほか傑出した独唱陣がそろいます。



マルクス・シュテンツ ©Mollina Visuals



アガ・ミコライ ©Wernicke